



Title	余剰のDE
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1991, 16, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93796
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

余 剰 の DE

中 岡 省 治

1. 緒言

1990年3月下旬から約10ヶ月ペルーのリマに滞在する機会を得た。その間リマのイスパニア語について、若干の観察が出来たが、その中でも、余剰の De — Dequeísmo と呼ばれている現象—について、以下に簡単な考察を行なうのが本稿の目的である。

ここでいう余剰の de とは、イスパニア語統語論上の特異な現象で、近年イスパニア及び中南米の口語に広く行なわれ、多くの文法学者の関心を惹くテーマでもある。イスパニア語文法の規範からみると、他動詞の直接補語として接続詞 *que* により導かれた補文の名詞節は、前置詞などの繫辞をとることなく、直接に動詞に接続されるべきである (*Me dijeron que saliese*)。しかし、上述したように、現在の口語では他動詞と *que* との間に前置詞 *de* をはさんだ構文 (*Me dijeron de que saliese*) が頻発している。これはイスパニア語圏に広く記録されている現象で、この余剰の *de* の使用を一般には *dequeísmo* と呼んでいる。リマのイスパニア語も、この点については積極的といっているほどの *dequeísta* であり、日常口語のレベルでこの現象が目立って多い。

このような、規範文法の立場からは非文法的という烙印を押されている現象であるが、以下にそれをどのように解釈すべきかを考えてみる。

2. 余剰の De と Martha Hildebrandt

2.1. 本来の他動詞構造である「動詞 + *que* の導く名詞節」に代って、「動詞 + *de* + *que* の導く名詞節」が出現し始めるのは16世紀であるといわれている⁽¹⁾。それ以後にも散発的にこの現象が記録されてきているがペル

一のイスパニア語でもそれが存在することを指摘し、これに解説を加えたのは、ペルーの言語学者 Martha Hildebrandt であった。彼女はその著 *Peruanismos*⁽²⁾ で、この現象につき一項目を設け、およそ次のように述べている。要約すると次のようになる。

「近年我々の教養語の中に、以前は教養を欠き下品な話し方にしかなかった用法が侵入しつつある。“Dice *de que* viene” のように、*que* の直前に前置詞 *de* を濫用する現象である。

この *de* の寄生虫的用法は、アルゼンチンや他の中南米諸国でも頻発しているが、無教養な話し方の特徴としてのみ存在する。イスパニアでは、昔のカスティリア語にいくつかの散発例が記録されているけれども、この連鎖 *de que* の誤った使用は、これまた田舎の俗っぽい話し方か、方言的な話し方の特徴と考えられている。カタルーニャ語でも事情は同じである。

このような品のよくない *de que* が今こんなに多用されるようになった、その原因はどこにあるのだろうか。

まず最初に類推の影響が考えられる。イスパニア語では制辞に前置詞 *de* を伴う *hablar de*, *dudar de*, *tratar de*, *quejarse de*, *alegrarse de*, *asustarse de*, *enojarse de* などの動詞がある。これらの動詞は、当然のことながら *de* を *que* の前に用いて、“hablo *de que* vendría”, “dudo *de que* pague”, “trató *de que* se quedara” などという⁽³⁾。しかし、こうした正しい構造の影響を受けて、この用法が制辞に *de* を要求しない動詞にも及んできている。それには、*pensar*, *saber*, *creer*, *suponer*, *deducir*, *escribir*, *decir*, *contar*, *relatar*, *opinar*, *declarar*, *sugerir*, *avisar*, *aconsejar*, *asegurar*, *ver*, *oír*, *escuchar*, *sentir*, *observar*, *hallar*, *contestar*, *encontrar*, *esperar*, *recordar*, *permitir*, *prometer* などの動詞があり、すべてイスパニア語で日常よく用いる動詞なのである。その結果生じた、“pensé *de que* eso era mejor”, “¿sabes *de que* estuvo aquí?”, “no creo *de que* lo haga” などは、正しくない表現になる。同じことが、非人称構文 *resulta que*, *sucede que*, *parece que*, *puede que*, にも起り、*resulta de que*, *sucede de que*, *parece de que*, *puede de que* のような正しくない表現をも生み出している。

またこれに加えて、この余計な前置詞は他の構造にも頻発している。

ひとつには、疑う余地のない “es hora *de que* me vaya” のような正しい表現の影響を受け、間違った形 “es verdad *de que* trabaja mucho”, “es urgente *de que* vengas”, “no es cierto *de que* lo sepa” などが使われている。それに加へ、この *de que* の侵蝕は *así es que*, *de manera que*, *de modo que* のような固定化した副詞的表現⁽⁴⁾ をも分離させるに至り、これらは、*dequeísmo* 信奉者によって、*así es de que*, *de manera de que*, *de modo de que* などの形に変化させられてしまっている。

De que という連鎖の乱用は、これまでみたように、類推の影響として説明出来る。しかし、Corominas は、これをむしろ過剰修正によるものとし、その根拠を、中南米では(カタルーニャと同じく), *no hay peligro de que* のような表現では、今なお(前古典期のイスパニア語と同じく), *de* を省略することが可能だ、という点においている⁽⁵⁾。Kany によれば、この余剰の *de* をもつ構文の中南米での拡がり、統語上のリズムからの諸要求に起因しているという。しかしイスパニア語話者の耳には、*de que* という好ましからざる連鎖は、むしろ文のリズムと快音調とを損なう作用しかしていないのである。」

これに加えて M. Hildebrandt は、「いうまでもないが、言語学本来の領域以外にもこの品のよからぬ *de que* の相次ぐ拡がりを助長した社会的要因が存在する」と述べ、ペルーでの言語教育の不備にも責任の一端があるとしている。しかし本稿の目的には、上記の観察、指摘で十分なので、以下にそれを基にして論述を進めてみたい。

2.2. この現象の分布については、中南米のみならずイスパニアにも及んでいることが、多くの論文、研究からも確認される⁽⁶⁾。加えて歴史的には、諸例がすでに16世紀や17世紀のイスパニア語に記録されてもいる。以下のような場合である。

- (1) *Dijo de que* vio a lo moza (Sánchez de Badajoz, *Recopilación*; C.E. Kany, *Sint. hisp.*, p.411).
- (2) *Sepa el mundo (...) de que* Camila no sólo guardó ... (Cervantes, *El Quijote*, I, 15)

また、名詞節を導く *que* との共起ではなく、これが不定詞の名詞句で現われる場合にも、余剰の *de* がみられることがある。

- (3) *Es costumbre de enviar legados o embajadores* (Cristóbal de Castillejo; R. J. Cuervo, *Dic. cons. y rég.* II, p.790).

それに加えて余剰の *de* 現象とは逆の現象、つまり、本来的には *de* を用いて補語としての名詞句を導くべきところを、この繫辞としての前置詞を省略してしまう現象も、すでに余剰の *de* の使用と同様、16世紀や17世紀のイスパニア語に現われてきている。

従って、通時的にみても、繫辞 *de* の特異な統語上の振舞は、付加と削除という対立する二方向に向って動いていることが分かる。

- (4) *Hago cuenta que he hallado en él un tesoro de contento y una mina de pasatiempos. Aquí está don Quirieleisón* (Cervantes, *El Quijote*, I, 6).

なお、リマのイスパニア語でも、*acordarse/darse cuenta/estar seguro/a pesar/... de que* のような場合に、*de* の省略が目立って多いことを付け加えておこう⁽⁷⁾。

2.3. 前項でみたように、また M. Hildebrandt も述べているように、余剰の *de* が現われる環境は「他動詞 + *que* が導く直接補語の名詞節」のみとは限らない。これ以外に「自動詞 + *que*」の場合で、表面的には *que* 以下の名詞節がその動詞の主語に位置付けられる場合 (*sucede que ...*), *que* 以下の名詞節が *ser* 動詞による非人称構文の主語になる場合 (*Es posible que ...*), 叙述補語になる場合 (*Lo que pasa es que*), などに現われると予想していい。また、*de manera que* などのような特殊な接続詞句もこの現象の洗礼を受けていると考えられる。それに加えて、この余剰の *de* は *que* によって導かれた名詞節の存在を必ずしも必要とせず、不定詞の直前にも、またときには単なる名詞(句)の直前に現われうることをも指摘しておきたい⁽⁸⁾。

具体例として筆者が採取しえたもののうち、以下にいくつかを挙げておこう。

- (5) *El profesor me dijo de que va a entregarme la lista de alumnos mañana al mediodía.*

- (6) Yo espero *de que* el gobierno comprenda la situación en que nos encontramos y que mantenga la política de medio pasaje para con los escolares.
- (7) ¿Como podemos permitir *de que* la gente vaya ocupando las márgenes del Rímac ?
- (8) (...), de lo que resulta *de que* esas gestiones no son legales.
- (9) El significado que le encuentro es *de que*, (...), una vez que se encuentran (las dos hermanas), surge entre ellas espontáneamente el amor fraternal.
- (10) Le costó un trabajo *de* bolearlo (María Arjona, Usos anóm., p.180).
- (11) En lengua indígena no sé *de nada* (M. Arjona, Id., p.181).⁽⁹⁾

3. リマのイスパニア語にみられる余剰の De

3.1. 筆者の個人的印象に基づき、余剰の *de* につき一般的な傾向を述べるとすれば、次のような特徴がある。

- a. 文章語には現われない。
- b. 新聞やテレビニュースの放送テキストそのものには現われない。
- c. ニュース報道などで、インタビューに応じて発言する人々から頻繁に聞かれる。
- d. 日常会話にも頻繁に現われる。この場合、大学卒の高学歴の人々のことばにもこの現象が多発している。
- e. 特に男性のことばに現われやすい⁽¹⁰⁾。

こうした点からも、前述の M. Hildebrandt の言、「近年我々の教養語の中に、以前は教養を欠き下品な話し方にしかなかった用法、云々」を再確認出来るのである。

3.2. リマのイスパニア語にみられる余剰の *de* の現象を論じ、これをサンティアゴとカラカスの場合と比較検討したものに、Jessica Mc. Laughlan, “Dequeísmo y queísmo en el habla culta de Lima” (*Lexis*, VI. No.1, 1982, pp.11-55) がある⁽¹¹⁾。この論文は34人のインフォーマントの発話を資料体とするもので、問題の *de* の使用について南米の二都市の現象との比較で、リマの場合が詳述されている。ここで資料体となったものが、後年、

Rocío Caravedo, *El Español de Lima - Materiales para el Estudio del habla culta* (1989) - として出版された。こちらをみると、インフォーマントの数が23人（男性13人，女性10人）に縮小されてもいるなど，利用しうる資料体の量にも差があるようなので，この Rocío Caravedo, *El Español de Lima*⁽¹²⁾ では，問題の現象がどのような現れ方をしているかを調査してみた。その結果を以下に挙げ，少しばかりの観察を加えてみたい。

3.3. 余剰の de を示す各種 que 構造について。

a. 「他動詞 + que」: いうまでもなく，que は直接補語としての名詞節を導く。

(12) (...) un ..., esponente venezolano creo quera, decía *de que* ..., la mayor parte de los que estudian la carrera de abogao lo hacen pues con ... (p.41)⁽¹³⁾

(13) Bueno te decía, no, *de que* ... el proceso político, pues todo proceso político tiene un trafondo económico y social ¿no? (p. 183).

(14) Bueno, te habrá contao N. N. que sietao en Alemania. (Sí.) *De que* hay un servicio fabuloso, bibliotecas excelentes, (...) (p.178).

(15) (...), como decimose puede ver ¿no? *de que* noes así (p.183).

これ以外に，主動詞を entender (p.58), pensar (p.79), sospechar (p.199), solucionar (p.234) とする場合はみられる。

また次の二例も余剰の de の現われる環境としては，仲々興味深いものがある。

(16) (...), porque justo hablando con N. N. me contó *de cómo* había sido el encuentro y luego del parentesco que yo ni me lo soñaba, con N. N. te lo juro (p.186).

(17) ¿Cuentoun cuento? En la época en que yo estaba se vio *de un* caso sumamente interesante (p.169).

文(16)と(17)については，もしそこに用いられた de が余剰の de と統語的に位置付けられるのであれば，この現象は que の直前にのみ生じるのではなく，一般に広く名詞節，名詞(句)の直前にも現われうることを示すケースになろう。

b. 「自動詞 + que」: この場合 que は主語節かあるいは叙述補語節を導く。便宜上, 以下のような区分をする。

I) *ocurrir, suceder* などの「偶発の動詞」とそれに後置される que に導かれた主語節の場合。

(18) *Ahora que ocurre, de que ... a consecuencia de las actividades cotidia no nos vemos ¿no?* (p.188)

II) *parecer* がその叙述補語に名詞か形容詞を従え, それに主語節が続く場合。

(19) *Me parece injusto de que ..., de que la gente estudie una carrera gratuitamente, y que después se vaya ...* (p.44)

なお, *me parece que* *nación en mil no, en mil novecientos nueve* (p.35) のように, *parece* と *que* との間に形容詞が現われない構造は, この余剰の *de* とは無関係である, とする考えが支配的である⁽¹⁴⁾。

III) 「Lo + 形容詞 + *ser* + que」: *que* 以下が主語節か叙述補語節か, 議論のあるところだが, ここでは叙述補語節と考えておく。

(20) *Lo cierto es bueno de que, si bien el el ciento por ciento de los campesinos no se ha beneficiado con esta rerforma, (...)* (p.183)

上記の *lo cierto ...* 以外には該当例はみられなかった⁽¹⁵⁾。

IV) 「*ser* + 形容詞 + que」

(21) *Yo no creo que sea posible pues de que lo ... ; haya médicos en el seguro, (...)* (p.43)

これは使用頻度数の高い構造であるが, 該当例は文(21) 1 例にしかすぎない。

c. 「副詞 (句) + que」

(22) *Ahora, digamos, el alumnado, proviene generamente de los estratos medios de nuestra sociedad. Ciertamente de que ... persiste todavía la idea, antigua del diplomático* (p.181).

(23) *Ahora por supuesto de que, nués la divina pomaa ¿no?* (p.184)

(24) (...), y sobre todo *de que* da mucha eperincia en cuestión de trato de relaciones públicas ¿no?, (...) (p.60)

d. 「名詞 (句) + que」: *que* に導かれた名詞節が先行する名詞 (句) の内容の補足説明を行なう, という意味関係がある場合。

(25) ese es mi deber : *de que* (...) tengamos un local más amplio

(J. Mc Lauchlan, *op. cit.*, p.26).

(26) (...); hicieron toda una ..., una planificación si se quiere, *de que* yo debía seguir en la N. N. (...) (p.210).

e. 「繫辞 + *que*」: この場合具体的には, *de tal manera* / *no obstante* / *o sea* / *por más + que* の4種類の接続詞句をいう。

(27) De tal manera *de que* ... nostante no, *de que* en el caso de Alemania que yo conozco, se recluta a los diplomático de carrera (...) (p.182).

(28) (...), y lo más grave para nosotros, que tienen poca comunicación ¿no? O sea bueno *de quese*, parte sufrible de Alemania (p.179).

f. 関係代名詞 *que* 節にも余剰の *de* の現象がみられる。

(29) (...) y va avanzando con fuerza, el libro *de* ... *de que* pensabamos sacar sobre Toledo (...) (p.156).

4. 上記諸例にもとづく簡単な分析

4.1. 上記諸例をも含めた抽出例42例から, この余剰の *de* についておよそ次の事柄を指摘することが出来る。

a. 主動詞との関連でこの現象をみると, 主動詞の時制, 叙法, 人称形か非人称形かの別は非関与的である。勿論のこと, *que* 節の叙法の選択も非関与的である。

b. この余剰の *de* の現われる文構造をみると, 「名詞・形容詞 + *de* + *que*」が多いのにも気付く。これに加えて, 「副詞(句) + *de* + *que*」, 「繫辞 + *de* + *que*」にも問題の *de* が現われてくるが, これらの構造にみられる副詞句 *por supuesto* の *supuesto*, 繫辞 *de tal manera* の *manera* などは, その音声的価値をみる限り, 強勢語で名詞に等しい。

c. 補足節に先行する *de* の場合は, その節とそれが言及する名詞(句)との間に息の休止がある。これはテキストでは, コロンとかコンマで示されている。また, これらの文構造の特徴として, 主動詞と *que* 節とが直接に繋がった連鎖をなさず, 両者間に *¿no?* が挿入されたりして, 先行要素と *que* 節との統語関係が不安定になりがち, という点をも指摘しうる。

4.2. さて, 前項に挙げた三点を次のように解釈, 整理してみる。

a. 「他動詞 + que」の構造に de が現れる場合には、この de は que の導く名詞節と先行する主動詞との関係を明示化するためのもの、と考えたい。上記3.3. a の場合に該当する15例のうち6例が、明らかにこのような環境で用いられている。

b. 「自動詞 + que」の構造では、3.3. b I), III), IV) は第一の場合に準じた説明が可能である。つまり、先行する名詞、形容詞との関係の明示化の機能をもつ de と位置付けることにする。3.3. d の de をもこの関係明示化機能と解釈する。

c. 3.3. c. と e. の場合には、構造的に本来 que の直前に位置すべき語、例えば supuesto (文23), manera (文27) は名詞類に位置付けられる種類のものである。そうすると、これらの語は el hecho de que, la idea de que, el caso de que など、多数イスパニア語に存在する構造への類推から、余剰の de を用いる構造を作り出しても、何ら不思議ではない。この場合も勿論のこと、de は先行する要素と que 以下の節との統語関係緊密化の機能を荷うもの、と考えたい。

d. この種の機能がすでに de に関し意識され始め、これが、文(12), (19), (29)の de 発動させることになっている、といたい。もしこの仮説が認められるとすれば、その文法機能を荷うのに適切な形として、最も中立性の大きい前置詞 de が選ばれたのも十分に納得がいく。これに「繋ぎ」の機能を与えるだけで、目的は十分に達成されたことになる。

5. まとめ

これまで簡単に余剰の de について考察した。特にその発生の理由を求める諸論の中で、類推説が有力のように思われるが、これは現象のごく一部しか説明しえないだろう。したがって、この現象を全体的な枠組の中で考察してみると、どうしてもイスパニア語の中にこの de を発動させるような傾向がある、といわざるをえなくなる。そこで、以下にこれまでの代表的な説を批判・検討して暫時の結論としたいと思う。

5.1. まず類推説をとる M. Hildebrandt は、すでにみたように、hablar de, dudar de ... のような規範的な構造が、本来は前置詞 de を制辞としない動詞に類推の作用を及ぼしたとする。その結果、一種の過剰修正的現象

が発生し、“*pensé de que eso era mejor*”のような、*de*の不正使用を惹き起すことになった、と結論する。しかしその説明には、何らの意味的類縁性も考慮されていない。こうみると、一つの構造がそれとはまったく無関係なもう一つの構造に、偶発的に影響を及ぼす、ということになる。しかし、類推の作用が二項間に有効となるためには、形態的にか、範列的あるいは連辞的にか、何らかの意味で両者を関係付ける要素、場面が必要であろう。従って、諸項間に共通の関与性がない場合に、類推説を推し進めても、それはあまり意味がないように思われるのである。なお、この点 R. J. Cuervo が“*Celebro que venga*”にみられる *celebro que* が、“*Me alegre de que venga*”に影響を及ぼし、“*Me alegre que venga*”を生むこととなった、といっているのは注目に値する⁽¹⁶⁾。

5.2. 余剰の *de* の発生は、“*Espero que venga*”と動詞 *espero* をパラフレーズした構造、“*Tengo esperanza de que venga*”の二構造の交叉にある、とする考え方がある。この二つの構造の交叉といえば、“*Espero de que venga*”だけでなしに、“*Tengo la esperanza que venga*”の二種の可能性がある。ここでは問題を余剰の *de* の発生という面からみると、この交叉説が有効であるためには、単一の動詞をパラフレーズした連鎖[動詞+(元の動詞と同一語幹の)名詞+*de*]が、元の動詞の代替形としての言語的価値をもつこと、が必要となろう。M. Hildebrandt が挙げている *pensar* 以下 *prometer* までの諸動詞をみると、この種のパラフレーズが容易な場合と、元の動詞に対しこれを見出しにくい場合とがある。後者についていえば、*decir*, *escribir*, *entender*, *oír*, *saber* など、挙げてみれば相当の数に及ぶだろう。また、元の動詞と共通の語幹をもつ名詞によるパラフレーズの連鎖はあっても、*impresionar* と *dar/tener la impresión de* の場合のように、両者間の意味の差が大きいこともある。*considerar* に対する *tomar en consideración* などを考えるとき、このパラフレーズした構造の存在によって、問題の *de* の発生を説明するのも無理がある、といわねばならない⁽¹⁷⁾。

5.3. こうした点を踏まえてこの現象を考えると、最終的には4.2.に述べたような結論に至らざるをえないのである。

まず最初にこの de の使用は、「主動詞 + que」(この場合主動詞が他動詞か自動詞かを問わず、また que の導く名詞節が直接補語節か主語節かを問わない) や「名詞・形容詞 + que」の構造で、特にこの連鎖が何らかの形で一息の休止や間投詞の挿入などで一中断されたときに、この中断から生ずる統語上の不都合さを緩和するために現われたもの、と考えたい。

こうした“統語関係明示化”の de の使用は、el hecho/el caso/la idea/... de que など、多用される構造への類推からも促進されているにちがいない。イスパニア語話者が上記のような統語環境で、前後二要素間の関係明示の必要を感じたときの繫辞として de を用いるのは、何ら新しい現象ではない。しかしこの de(この段階では「余剰の de」ではない) が、文(5)や(6)など、本来その de を必要としない統語環境に用いられたところに、新たな問題が提起されるのであろう。

加えて、一つの言語の現象の成立には、いくつかの理由が複合的に介在している。この点で、問題の de の表層での使用を促す音声的理由にも触れておきたい。つまり、文(13), (14), (15)など、先行要泰と que とが直接に繋がった連鎖をなさない場合、補文を直接に que から始めるのは、文構成のリズムのうえで唐突で重い感じを与えるのではないか、と思われる。ここでこの唐突さを緩和するための音声的要素として、前置詞の中でも最も機能的にも中立性の高い de を用い、これを que に前置して、文のリズムの円滑化を求めたともいえよう。これが、“Es posible que su preferencia se deba al ritmo sintáctico”⁽¹⁸⁾ の意味するところなのだろうか。

最後に余剰の de 現象と関連して指摘したいのは、これとは逆方向の動き、つまり文(4)にみられるような、名詞節・名詞(句)の直前での de 消去の現象である。これら二つの現象は、一見対立するもののように思えるが、決してそうではなく、相互に連動した関係にある、と考えなければならない。特にこの現象が当地リマのイスパニア語に多発するのをみると、de-queísmo と queísmo を関連付けた枠組からの現象分析の必要性を感じるのである。

(リマ, 1990年12月)

(註)

- (1) R. J. Cuervo, *Diccionario de construcción y régimen de la lengua castellana* II (1920), pp.789-90 ; C. E. Kany, *Sintaxis hispanoamericana* (1976), p.411.
- (2) M. Hildebrandt, *Peruanismos* (1969), pp.143-145.
- (3) M. Hildebrandt, *op. cit.*; p.143. 著者はここではこれ以外に多くの文例を出しているが、全部は挙げなかった。以下の用例についても同じ。
- (4) 著者は “expresiones adverbiales fijadas” という表現を使っている (*op. cit.*, p. 145)。
- (5) No hay peligro *de* que el aluvión alcance esta población construida en la época colonial という文構造では、*de* は削除してもいい、というのが当地リマのイスパニア語話者の反応であった。
- (6) J. Mc. Lauchlan, “Dequeísmo y queísmo en el habla culta de Lima”, *Lexis*, Vol. VI, Num. 1 (1982) pp.11-55. 本論文中 p.16の (註19) に、イスパニア語圏諸国で出版された関係論文のリストが挙げられている。
- (7) 以下のような *de* の省略はリマのイスパニアで多発している。
 1. Yo *me di cuenta que* me había movido mi maleta *pe no se robó nada*. (R. Caravedo, *El español de Lima*, p.46)
 2. El problema nace cuando el muchacho *se entera que* el rico ranchero es hermano de un gran amigo suyo. (*El Comercio*, 14 de oct. de 1990)
 3. Aspecto de zona arqueológica del Parque de las Leyendas que está expuesta a depredación, *a pesar que* su cuidado es responsabilidad del Instituto Nacional de Cultura (*Id.*, 16 de oct. de 1990)
- (8) M. Arjona, “Anomalías en el uso de la preposición *DE* en el español de México”, *Anuario de Letras* XVI (1978), pp.67-90. 特に本論文には、名詞句に先行する余剰の *de* の用例が多く挙げられている。
 なお、リマのイスパニア語では、次のような例もある。
 Mira *de* los muchachos, ¿no ?, *questuvieron el grupo deaspirante de lacción deaquella época ¿no ?, (...)* (R. Caravedo, *op. cit.* p.188)
- (9) 文例(5)-(8)は筆者がテレビのニュースのインタビューから聴取したもの。(9)は一学生のレポートの中にあった文。(10)と(11)は、M. Arjona, “Usos anómalos de la preposición *DE* en el habla popular mexicana”, *Anuario de Letras* (1979), XVII, pp.167-184 による。
- (10) J. Mc. Lauchan, *op. cit.*, pp.33-34. 但し、この余剰の *de* が男性のことばの特徴か否かについては、照会した人々の反応はまちまちであった。なお我々のお世話になっていた *pensión* の *señora* は大の *dequeísta* である。
- (11) (註6)を参照のこと。なおこの論文は、諸々の角度から *dequeísmo* と *queísmo* とを論じた示唆に富むものである。
- (12) これは1976年以降イスパニア語圏各首都の言語調査・研究の資料として、各国で相次ぎ出版されてきている資料集の一環をなすものである。

- (13) 用例を表記するうえで, (...) は筆者の判断で削除した部分を示す。他の表記はテキストのまま。
- (14) I. Mc. Lauchlan, *op. cit.*, pp.22-23.
- (15) Lo admirable es que ... などのように, 多発する構造なのに, 余剰の de が lo cierto es que ... 以外には現れないのは, 注目に値する。
- (16) R. J. Cuervo, *op. cit.*, p.792.
- (17) この点については, 例えば F. Lázaro Carreter は, 《los contenidos semánticos de “Temo que no llegue a tiempo” y “Siento el temor de que no llegue a tiempo” son *sumamente vecinos*》といている (F. Lázaro Carreter, “El dequeísmo”, *El Comercio*, 2 de julio de 1981, p. 2).
- (18) C. E. Kany, *op. cit.*, p.411.

参考文献

- Alvarez Vita, Juan: *Diccionario de peruanismos*, Lima, Studium, 1990.
- Arjona, Marina: “Anomalías en el uso de la preposición *de* en el español de México”, *Anuario de Letras*, (México), XVI 1978, pp. 67-90.
- _____ : “Usos anómalos de la preposición *de* en el habla popular mexicana”, *Anuario de Letras* (México), XVII 1979, pp. 167-184.
- Benvenuto Murieta, Pedro M.: *El lenguaje peruano*, Lima, Imprenta Sanmarti, 1936.
- Bello, Andrés: *Gramática de la lengua castellana* (Obras completas V), Caracas, Ediciones del Ministerio de Educación, 1951.
- _____ : *Estudios gramaticales* (Obras completas VI), Caracas, Ediciones del Ministerio de Educación, 1951.
- Caravedo, Rocío: *El Español de Lima — Materiales para el Estudio del habla culta —*, Lima, Pontificia Universidad Católica del Perú, 1989.
- Carrión, Enrique: *La lengua en un texto de la ilustración*, Lima, Pontificia Universidad Católica del Perú, 1983.
- Cuervo, Rufino José: *Diccionario de construcción y régimen de la lengua castellana*, Bogotá, Instituto Caro y Cuervo, 1954.
- Escobar, Alberto: *Variaciones sociolingüísticas del castellano en el Perú*, Lima Instituto de Estudios Peruanos, 1987.
- _____ : *Perú ¿país bilingüe?*, Lima, Instituto de Estudios Peruanos, 1975.
- Hildebrandt, Martha: *Peruanismos*, Lima, Moncloa-Campodónico Editores Asociados, 1969.
- _____ : “Lo nuevo, lo malo y lo nuestro”, *Caretas* No.1138 (10 de dic. de 1990), Lima, pp. 52, 53 y 72.

- Kany, Charles E.: *Sintaxis hispanoamericana*, (Versión española de M. Blanco Alvarez), Madrid, Gredos, 1976.
- Lázaro Carreter, Fernando: "El dequeísmo", *El Comercio* (2 de julio de 1981, Lima), A-2.
- Llorente M. de G., Antonio: "Construcciones sobre el español actual", *Anuario de Letras* (México), XVIII, 1980, pp. 6-61.
- Mc. Lauchalan, Jessica: "Dequeísmo y queísmo en el habla culta de Lima", *Lexis* (Lima) VI, 1, 1982, 11-55.
- Moliner, María: *Diccionario de uso del español*, Madrid, Gredos, 1968.
- Moreno de Alba, José G.: *El español de América*, México, Fondo de Cultura Económica, 1988.
- Real Academia Española: *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe, 1986.
- _____ : *Diccionario de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1970.
- Rivarola, José Luis: "El español del Perú, balance y perspectiva de la investigación", *Lexis* (Lima), X, 1, 1986, pp. 25-52.
- _____ : *La formación lingüística de Hispanoamérica*, Lima, Pontificia Universidad Católica del Perú, 1990.
- 森本久夫: 「ペルーで目にした語彙と表現」, *Estudios, Hispánicos* (Osaka), 9, 1983, pp.55-74.